

人文社会系

中世日本の絵巻研究

—「型からみる絵巻検索システム」の構築を目指して—

普遍教育センター（文学部・人文社会科学研究科）・教授 池田 忍



研究の背景

日本では、12から17世紀を中心に、大変多くの絵巻がつけられました。絵巻とは、物語絵画の一種で、何かの物語を視覚的に表したものです。日本の絵巻の大きな特徴は、文字が書かれた部分（詞書（ことばがき））と絵が描かれた部分が交互に現われ、両者が観る者に働きかけ、メッセージを伝える点にあります。また観る者は、自らの手で絵巻を操作し、自分のペースで右から左へと展開する文章と絵とを読み取り、味わうことができます。漫画や映像に慣れ親しんだ現代の私たちにとっても、中世人が魅了されたこの絵巻という複合的な媒体は、なかなか奥が深く興味深いものです。

さて、従来の絵巻研究では、王朝物語、説話文学、軍記、高僧の伝記、社寺縁起、御伽草子というように、物語の主題の相違に応じて分類され、ジャンルごとに作品の特徴や、絵師による表現の違いなどが、精査・探究されてきました。これに対し、私たちの研究チームは、視点を変えて、絵巻の画面を、一定の要素（「もの」）によって構成される「型」という視点から、横断的に捉えなおすことを目指しています。すなわち、人々の暮らし、労働、信仰、行事、儀礼などの人の行為／営みと、それが生起する空間（場・環境）を、「型」として捉え、各絵巻作品の中から抽出し、比較検討を進めてきました。美術史、文学、建築史の研究者が連携し、絵巻を「行為の型」と「空間の型」から読む、それがプロジェクトの課題です。

研究の成果

目下構築中の「型からみる絵巻検索システム」を用いると、例えば、「食事をする」「筆を執る」「楽器を演奏する」「眠る」「神仏に祈る」「出家する」「病む」といった場面を、様々な絵巻作品の中から抽出して、比較・検討することが可能になります。こう

した普遍的な行為が、描かれた人物の身分や社会階層、職業、ジェンダーに応じ、何時、どのような空間・環境でなされているのかが見えてきます。人の行為が、描かれた建築や環境、多様な「もの」に関係づけられ、身分差や階層差、ジェンダーの差異が描き分けられている様相が、具体的に浮かび上がってきました。



「星光寺縁起絵巻」調査（東京国立博物館）

今後の展望

今後の研究では、掛幅や冊子など、異なる形態の物語絵画と比較しながら、絵巻が、特定の「型」を組み合わせることで、時間と空間という二つの要素に関し、どのような表現を達成しているのかを明らかにしていきたいと考えています。

またこの検索システムは、研究者にとどまらず、一般の美術愛好家や、歴史に関心を持つ人々に、新たな絵巻の見方を提示するツールとして使ってもらえるように、改良を重ねています。絵巻には、過去の人々の日常生活や精神活動、異国や異界、死後の世界への関心が表されています。その豊かな表現世界を手がかりに、現実と架空の世界、他者の世界を架橋し、構想する際の想像力の拠りどころとなるイメージについて、共に考えを深めていきたいのです。現代のメディアを検討するきっかけにもなるでしょう。

【支援を受けた科研費】

- 平成19～21年 基盤研究（B）「もの」とイメージを介した文化伝播に関する研究 —日本中世の文学・絵巻から—
- 平成22～24年 基盤研究（B）絵巻に描かれた「場」と「もの」に見る中世日本の重層的世界観に関する研究